

日本南極地域観測隊犬橇関係報告 (I)

犬飼哲夫*・芳賀良一*

TRAINING OF DOG TEAMS AND PREPARATION OF DOG SLEDGES FOR THE JAPANESE ANTARCTIC RESEARCH EXPEDITION, 1956-57. PART I.

Tetsuo INUKAI* and Ryoichi HAGA*

Abstract

Organization in charge The Polar Research Group of Hokkaido University, Sapporo, Hokkaido**, headed by Prof. T. INUKAI and sponsored by the Institute of Applied Zoology, Hokkaido University, took charge of the training of the Saghalien dogs as well as the preparation of the dog sledges used in J.A.R.E. 1956-57.

Short history of dog sledges in Hokkaido The Ainus, the natives of Hokkaido, used not to employ dog sledges of the polar type for transportation on the snow. Saghalien dog sledges were brought into this island from Saghalien in the Meiji Era (1868-1912) by the Yamato race immigrated from the mainland of Japan, but were not so extensively used as in Saghalien. As a matter of fact, we had to institute investigations before we could establish the plan of bringing up powerful dog sledge teams for J. A. R. E.

Distribution of Saghalien dogs in Hokkaido In 1956, when the preparations for J.A.R.E. were started, we had about one thousand head of Saghalien dogs in Hokkaido, including five hundred kept in Rishiri Island.

Most of them had been crossed with southern breeds after being brought in from Saghalien, but we could find out about one hundred head of fairly good strains.

Properties of Saghalien dogs in Hokkaido

The Saghalien dog is a mixed breed of polar dogs which came over the frozen seas to Saghalien. It has an appearance resembling to that of the Leica, or that of the Eskimo dog. Typical shape measurements of the Saghalien dogs in Hokkaido are given in Tables 2 and 3.

The Saghalien dogs have a yielding temper and an excellent towing capacity, and they withstand long trailwork. They are adapted to bitter cold; they can stay outdoors overnight even when the atmospheric temperature is as low as -40°C . Their chief food is fish.

Training camp for J. A. R. E. dog teams

A training camp was opened in March 1956 in Wakkanai, a small city situated on the northernmost tip of Hokkaido. The selected dogs were gathered there, and the training was started at once. Mr. Naotaro GOTO of Giliak*** origin was appointed as the chief trainer. Several candidates for J.A.R.E. and

* 北海道大学農学部動物学教室. Institute of Zoology, Faculty of Agriculture, Hokkaido University.

** The northernmost of the four big islands of Japan.

*** One of the natives of Saghalien.

members of the Polar Research Group took part in the training. In October 1956, the camp sent out two dog teams including twenty adult males and two young females off to J.A.R.E. 1956-57. The training was continued for the sake of the preparation for J.A.R.E. 1957-58, but was given up in July 1957 when it was decided that this expedition would not take new dog teams. The camp was closed at the end of July.

Diary of training

Mar.—Apr., 1956 Investigation of gathered dogs and organization into two teams. Selection of leading dogs. Light work on the snow.

Apr.—May Training for teamwork, with ground sledges (Snow had disappeared by the middle of April).

May 11-31 Training in snow-covered Tateyama Mountains (About 3,000 m high, located in the middle of the mainland of Japan).

Jun.—Jul. Special training for leading dogs (with ground sledges).

Jul.—Aug. Light work on the ground.

Summer vacation Aug. 11-20

Aug.—Sept. Light work with ground sledges.

Sept.—Oct. Selection of dogs to be accompanied by J.A.R.E. 1956-57. Strengthening the towing capacity and the staying power of the selected dogs.

Oct. Light work on the ground. Disciplines for living in transport corrals.

Two dog teams left Wakkanai on Oct. 29, arrived at Tokyo on Nov. 3, and got aboard

the Soya on Nov. 6.

Nov. Preparations for J. A. R. E. 1957-58 started. Selection of new leading dogs. Training for teamwork.

Dec. Two new teams organized. Training on the snow started.

New Year's vacation Dec. 29—Jan. 3.

Jan.—Feb., 1957 Training on the snow. Two teams nearly completed.

Feb. 21—Mar. 3 Trailwork of 266 km from Wakkanai to Asahikawa with two sledges. Vacation Mar. 4-15

Mar.—Jul. Schedule of training was cut down according to the information that J. A. R. E. 1957-58 would take nothing but a few dogs for supplementation. Light work on the snow and on the ground.

Jul. 15 It was decided that no dogs would accompany J.A.R.E. 1957-58.

Capacities of trained dogs In the trailwork Feb. 21—Mar. 3, 1957, two teams of dogs covered 266 km from Wakkanai to Asahikawa in 11 days, at a mean speed of 24 km/day, or 4 km/hour (45 minutes work and 15 minutes rest). The larger sledge pulled by 12 dogs was loaded with cargo of 370 kg weight and was driven by 3 men; the smaller one pulled by 5 dogs was loaded with cargo of 120 kg weight and was driven by 2 men. The tow-line used was of the Saghalien type as illustrated at the end of the text.

This trial proved, we believe, that the Saghalien dogs are not in the least inferior to any other kind of polar sledge dogs.

I. 緒 論

昭和 31 年 1 月 30 日に西堀栄三郎博士をむかえて北大極地研究グループが発足した。その目的は極地研究を課題とし、第 3 回国際地球観測年の南極観測基地の設営、装備などをバックアップし、日本の極地研究の全国的、恒常的組織化の中核体の一つとして活動することである。この目的のつとより、樺太犬による犬ソリの研究を下記のメンバーによつてすすめた。

北大農学部動物学教室	犬 飼 哲 夫	(代 表)
〃 〃	芳 賀 良 一	
北海道学芸大学生物学教室	竹 内 恭	
北大理学部地質学教室	木 崎 甲 子 郎	
北 大 山 の 会	小 林 年	
北 大 山 岳 部	永 光 俊 一	(獣医学部)
〃	安 藤 久 男	(理 学 部)
〃	加 納 正 敏	(〃)
〃	牧 野 博 恒	(農 学 部)
〃	宮 地 隆 二	(〃)
〃	及 川 収	(教 養 部)
北 大 山 の 会	加 納 一 郎	(顧 問)

II. 本邦における犬ソリの歴史

本邦における犬ソリの歴史は、北海道に古くから行われて来たわずかの犬ソりと、旧日本領の樺太において発達した犬ソリの二つに分けて考えることができる。後者は旧土人間に古来行われてきた犬ソりと、日本領有後旧土人から和人に伝えられた犬ソりとに分けられる。従来本邦の犬ソリに関しては、これらのものがいつしよに考えられてきたが、それぞれの民族性や環境に応じて発達したもので、別個に考えるべきものである。樺太で発達した犬ソリの歴史は別報（犬飼・芳賀，1957）にゆずり、主に北海道における犬ソリについてのべる。

北海道のソリ犬は、大部分がいわゆる長毛種の樺太犬で、樺太旧土人間に飼養されていた短毛種のもは極くまれである。これらの犬はいわゆる北方犬であるが、いつ何処からどのようにして北海道に移入されたかの正確な記録はない。しかし北海道の旧土人であるアイヌには昔からの犬ソリがなく、また現在のスキーに相当するストーもない。アイヌにはアイヌ犬（北海道犬）と称される狩猟犬が飼養されているが、ソリ犬としては全く使用されていない。これらのことから北海道の犬ソリの歴史は、従来云われてきたような古い歴史をもつ盛んなものではなく、明治時代になつて樺太との交流がはじまつて以後、和人によつて移入されたものであると推察される。

北海道の開拓の歴史をみると、開拓地の常として野犬が多く、当時の県庁であつた開拓使が、野犬による被害防除のために畜犬規則を定めて捕獲を奨励し、犬の飼養を制限した。その間の事情を調べてみると、北海道には古くから非常に沢山の犬がいたことは確かであるが、犬の飼養は明治以後著しく制限されているのである。信頼できる古い毛皮業者の話によれば（梶原菊太郎氏談）、長毛種の樺太犬の皮がではじめたのは明治 20 年代のことであり、また現在犬ソ

りの最も盛んな利尻島には、大正 10~12 年の大凶漁時に樺太に出かせぎに行つた人達が連れ帰つた犬がふえたのであるといわれる（小林実氏談）。一方、ソリ犬の食糧となる魚を考えてみても、アイヌは狩猟民族ではあつたが、漁撈は主に和人渡来後におそわつたものであり、樺太のように多数の使役犬を養うに足るだけの魚を保有できたとは考えられない。これらのことから、北海道の犬ソリは明治以後に樺太の旧土人から伝来したものであると推定できるのである。

こうして樺太から移入された犬ソリも、飼料の魚が高いために、樺太の土人のように 10 頭前後でひかせる犬ソリとして用いることはできず、また技術的にも困難があつて、単独で曳かせる犬ソリに変わり、夏は荷車曳きやリヤカーを曳かせるようになった。しかし積雪期の犬ソリは大正時代から昭和初期までは、条令によつて特別の許可を得なくては使用できない規則で、そのためにも北海道の犬ソリの発展はさまたげられた。ソリそのものについても、固定したものがなく、樺太土人のスケーニやナルタ或いはノソという型のソリもない。馬ソリや市販の人曳き用の小型ソリがあるだけである。しかし特に純粹の樺太犬で牽引能力がすぐれ、営業上必要と思われた場合には、能力試験を行つた上で警察署から犬ソリ使用許可証（木鑑）がわたされたが、その例は少なかつた。

大正 7, 8 年頃の北海道における樺太犬の状態は、当時樺太犬に興味をもつていた 2, 3 の人々の話を総合すると、倶知安以南にはソリ犬は全くなく、倶知安町に 5, 6 頭飼養され、小樽、札幌にも 5, 6 頭が番犬として飼養されていた程度であつた（芳賀恒太郎氏談）。旭川附近では昭和 5, 6 年頃にはじめて 1, 2 頭飼われたが、殆んどふえることはなかつた（三上秀逸氏談）。その後樺太との交流が盛んとなり、港町や漁村に長毛種の樺太犬がもちこまれて、だんだん荷車曳きなどに使われるようになり、小樽や利尻島には相当数の曳犬が飼養されるようになった（唯是日出彦, 1935）。しかし蕃殖に十分留意しなかつたために著しく雑種化し、また荷車曳きが主で、犬櫓は盛んにならなかつた。当時の樺太犬の所有者は零細な漁民や各種の小売業者が主であつた。

昭和 17 年になつて、たまたま北部軍は積雪期の交通や軽量物の運搬のために樺太犬の犬ソリの使用を計画し、北海道において使役飼育法の基礎的資料を得るために、樺太敷香地方で買上げた樺太犬短毛種 10 頭と櫓 1 台を移入し、駆者（旧土人）2 名をまねいて、昭和 18 年 1 月 20 日から 2 月 5 日までの 17 日間にわたつて調査研究を行つた（日下, 1949）。この時移入した樺太犬がそのまま北海道に配置され、終戦後民間に払下げられ、旭川、札幌地方の愛好家の手にわたつた。しかしこれらのソリ犬も、馬櫓や自動車の発達にともなつてどんどん衰微し、札幌方面では使役にたえる犬は極めて少なくなつた。ただ旭川以北や利尻島において、比較的良質なものがわずかに実用に供されている程度である。

以上の事から、犬ソリの発達には環境と飼料と民族性に支配されるもので、冬期の交通機関として重要であるが、より牽引力のある馬櫓の利用出来る処では、馬櫓の方が使い易く、馬櫓も

また機械力の進展にともなつて自動車や雪上車におきかわりつつある。したがつて樺太は民俗としての犬ソリの世界の南限で（梅棹，1943），今後北海道の樺太犬を極地のソリ犬として盛んにするためには，特定の設備のもとに計画的に行う必要があると結論できる。

III. 北海道におけるソリ犬の現況

北海道におけるソリ犬の大部分は，樺太犬の長毛種である。昭和 27 年頃から一時シェパード犬の犬ソリによるドックレースが盛んになつたが，興味本位のもので，実役に用いられた事はない。

道内の樺太犬の調査にあつては，北海道衛生部を通じて全道の各保健所に依頼し，狂犬病予防法による畜犬登録原簿から樺太犬の所有者を調べ，また日本ケンネルクラブ等の愛犬団体の登録犬を調査した。各保健所に登録されていた樺太犬は，第 1 表に示す通り 491 頭で，これに利尻島の約 500 頭を加えて，全部で約 1,000 頭である。しかしこれらの犬は，ただ樺太犬として登録されているだけで，能力その他は全く不明であるから，主要地におもむいて状況を調査した。調査地は利尻島（鴛泊村，杓形村，鬼脇村，仙法志村），稚内市，豊富村，名寄町，旭川市，深川町，留萌市，増毛町，苫小牧市，苫前村，一己村，北見市，札幌市，豊平町，白石村等で，このほか日高地方，十勝地方，網走地方等をも調べた。

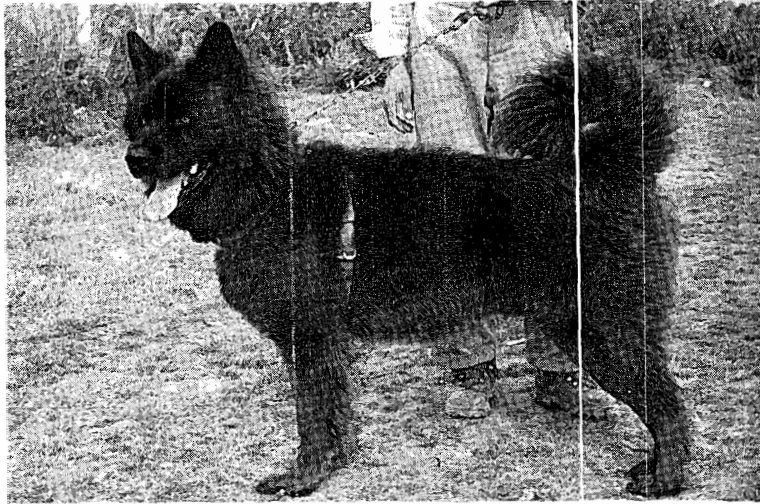
第 1 表 北海道における樺太犬の飼育数

Table 1. The number of Saghalien-dogs kept in Hokkaido.

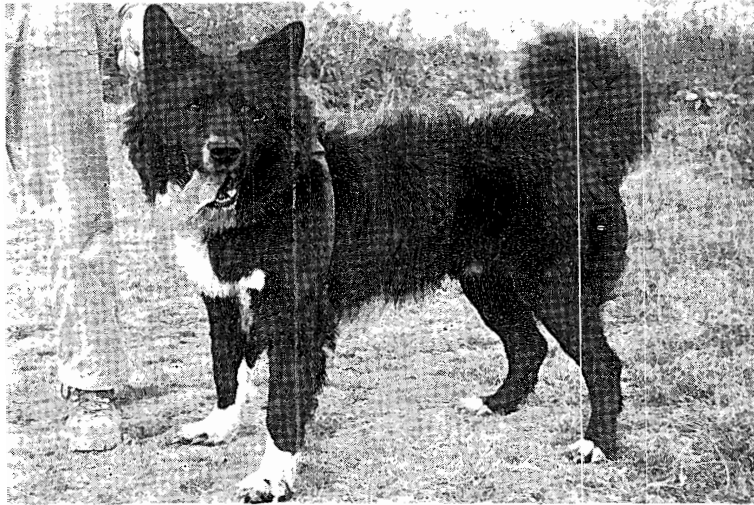
No.	地	名	頭数	No.	地	名	頭数	No.	地	名	頭数
1	千	歳	17	11	岩	内	6	21	函	館	17
2	美	唄	12	12	俱	知	3	22	旭	川	30
3	夕	張	5	13	江	差	1	23	北	見	1
4	由	仁	4	14	苫	小	8	24	札	幌（中央）	94
5	砂	川	7	15	池	田	4	25	札	幌（西）	73
6	滝	川	10	16	釧	路	1	26	帯	広	27
7	深	川	35	17	紋	別	1	27	利	尻（杓形）	200
8	富	良	38	18	稚	内	10	28	利	尻（鴛泊）	150
9	士	別	28	19	留	萌	20	29	利	尻（鬼脇）	100
10	名	寄	28	20	小	樽	11	30	利	尻（仙法志）	50

計 991 頭（昭和 31 年 4 月調）

第 1 表の約 1,000 頭のうちのおよそ 100 頭前後が，比較的良好な系統を保存しているだけで，他は雑種化が甚だしい。このうち短毛種は極めて少く，旭川近郊に 20 頭前後，他はすべて長毛種である。雑種化の傾向としては，短毛種では土佐犬，秋田犬，北海道犬との雑種が多く，一般に体長がつまり，脚が細く，この傾向は利尻島において特に目立つ。長毛種は外形的には前種ほど著しい雑種化はないが，大半は垂耳となり，体型全体に矮性が認められる。し



クマ (比布) (雄)
KUMA (Pippu)
(male)



クマ (紋別) (雄)
KUMA
(Mombetsu)
(male)

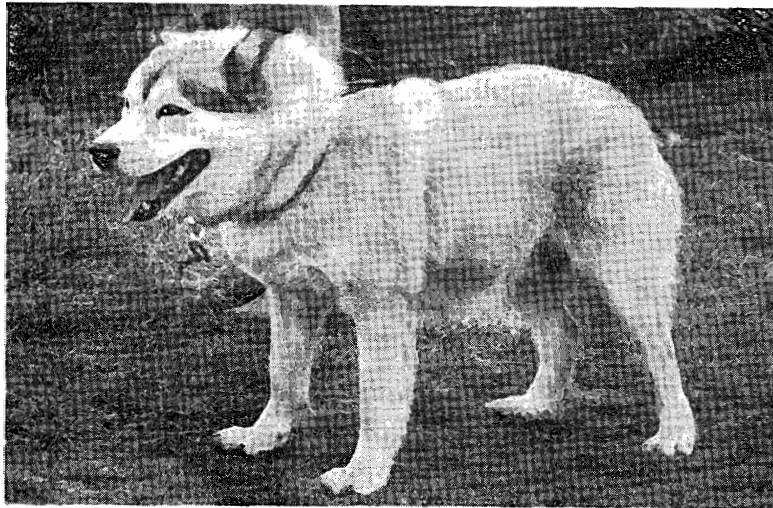


アンコ (雄)
ANKO (male)

写真 1 南極に行つたカラフト犬
Photo. 1. Saghalien dogs accompanied by the Japanese
Antarctic Research Expedition.



シロ (雄)
SHIRO (male)



リキ (雄)
RIKI (male)



モク (雄)
MOKU (male)

写真 2 南極に行つたカラフト犬
Photo. 2. Saghalien dogs accompanied by the Japanese Antarctic Research Expedition.

が長い。耳は日本犬のように三角形で立っているが、垂耳のものも 30~40% みられる。雑種化の著しいものは土佐犬のような全くの垂耳のものもあり、角度や形も様々である。樺太犬は大体においてライカ犬やエスキモー犬と非常によく似ており、これら犬種の氷上渡来による混血種であることがうかがわれ、しかも無秩序の交雑が樺太犬の変異の巾を広くしたものと考えられる。したがって樺太犬とは樺太に土着した北方犬のグループ名と解すべきと考えられる。

2. 体毛 樺太犬の毛色は様々ではあるが、一般に黒、黒白ブチ、狼灰色、茶、薄茶、白の6色に属し、黒系の犬は鼻鏡は黒く、虹彩も黒味勝であるが、白及び茶系のものは肉色の鼻鏡で、虹彩は明るい。虹彩は一般に黒味が強いが、片目が白くなつたいわゆるロスケ眼のものもみかけられる(竹内, 1949)。背部の毛の長さは長毛種では 10~15 cm, 短毛種では 5~8 cm で、被毛はよく発達し、特に綿毛が密生して寒さに強い。また毛の長さが 8~10 cm の中間形のものもみられる。

3. 外部形態測定値 長毛種と短毛種によつて多少の差異が認められ、一般には短毛種の方が長毛種よりも小さいが、短毛種を父として生れた長毛種の仔のなかの短毛型は、体型が長毛型で比較的大きい。測定値は第2表及び第3表に示すとおりである。

第2表 北海道における樺太犬短毛種の外部形態測定値

Table 2. Shape measurements of Saghalien dogs bearing short hair in Hokkaido.

No.	犬名 name	性 sex	年齢 age	体重 weight	体長 length	体高 height	胸囲 chest	備考(○参加犬) Remark (○ Dog accompanied by J.A.R.E.)
1	リキ	♂	7	34.7 kg	62.7 cm	59.0 cm	77.0 cm	○
2	テツ	♂	6	31.5	65.0	55.0	74.0	○
3	ライ	♂	4	25.1	64.0	58.0	71.0	
4	ヤス	♂	1	28.8	64.0	59.0	76.0	
5	デリー	♂	5	29.9	69.0	61.0	70.0	○
6	リュ	♂	11	32.0	70.3	59.0	77.0	
7	ジョン	♂	8	37	74.0	62.0	80.0	
8	ジャック	♂	5	34.0	66.0	61.0	78.5	
9	ミミ	♂	6	37	72	62	—	
10	ポチ	♂	2	35.5	68.0	62.5	73.5	
11	コロ	♂	3	22.0	65.0	54.0	—	
12	ベック	♂	4	37.8	71.1	62.0	74.0	○
13	ロク	♂	2	34.4	71.0	66.0	77.0	
14	ハチ	♂	2	33.8	74.0	65.0	77.0	
15	ヤマ	♂	2	29.0	63.5	59.5	76.0	
16	マサ	♂	2	24.0	60.5	54.5	71.0	
17	ペス	♂	4	38.3	70.3	64.2	78.5	○
平均 mean				32.0	67.7	60.2	75.3	

4. 性質 他犬種にみられるような稟性はなく、北方犬の特徴として従順温和で、融和性をもっている。したがって犬と何等つながりのない人でも犬ソリを使用できるが、行動能力は犬の

第3表 北海道における樺太犬長毛種の外部測定値

Table 3. Shape measurements of Saghalien dogs bearing long hair in Hokkaido.

No.	犬名 name	性 sex	年齢 age	体重 weight	体長 length	体高 height	胸囲 chest	備考(○参加犬) Remark (○ Dog accompanied by J.A.R.E.)
1	テツ	♂	7	37.0 kg	72.0 cm	62.0 cm	—	
2	クマ (紋)	♂	3	40.2	75.0	66.0	78.0 cm	○
3	クマ (風)	♂	4	32.3	69.2	57.0	70	○
4	クマ (比)	♂	4	37.8	73.0	64.8	75.5	○
5	ジャック (札)	♂	3	28.0	62.0	58.0	—	
6	マール	♀	2	32.0	66.0	57.0	—	
7	クロ	♀	1	26.0	63.0	55.0	—	
8	アンコ	♂	2	34.8	70.0	65.0	75	○
9	クマ (沼)	♂	3	26.0	64.0	55.0	—	
10	モク (深)	♂	2	36.0	69.0	62.5	72.0	○
11	ゴロ	♂	2	43.2	76.0	67.0	78.5	○
12	モク (札)	♂	3	34.5	72.7	62.0	69.0	○
13	アカ (札)	♀	3	23.0	60.0	55.0	—	
14	トム	♂	7	34.8	68.0	62.5	73.5	○
15	サブ	♂	1	29.7	64.8	59.5	70	
16	ジロ	♂	1	33.2	68.0	61.0	78.5	○
17	タロ	♂	1	32.2	67.1	62.0	73.0	○
18	シロ (札)	♂	5	30.0	66.0	59.0	—	
19	アカ (稚)	♂	5	31.9	61.0	56.0	71.5	○
20	クロ (利)	♂	4	36.0	68.4	59.0	73.0	○
21	ジャック (利)	♂	5	34.9	64.0	59.0	78.5	○
22	アカ (利)	♂	7	38.0	66.0	60.0	—	
23	シロ (利)	♂	3	32.0	65.3	64.5	71.5	○
平均 mean				33.2	67.5	60.4	73.8	

使い手の如何によつて決まる。数頭以上で組織された犬ソリにおいては、犬は曳き綱にむすびつけられる順序に対して優越感に近いものをもつらしく、特に先導犬において強い。また樺太犬はすぐれた方位感覚や帰家性をもち、通常 20 km~30 km 離れた未知の処から飼主のもとに帰ってくる。また極めて粗食にたえ餌も1日1回でよく、その飼料は作業時で1頭が魚 500 匁~1貫目である。樺太土人は夏季は放し飼いにし、殆んど餌を与えない(犬飼, 1943)。これらの性質のほか、著しい特徴は牽引力が強くしかもその耐久力のあることである。他犬種のように一時的な牽引ではなく、あきないでよく曳く性質をもっている。また耐寒性が強く特に犬舎というものを必要とせず、-40°C くらいでも雪上に平気で生活できる。しかし暑さには弱く、一般に +10°C 以上になると食欲が減退し体重が減少する。もつとも夏季 +25°C~30°C くらいでも通風さえよければ飼うことができるが、永く飼うことは困難で、北海道でも札幌以南で樺太犬を健全状態で飼うことは無理である。

樺太犬は野性犬や狼のようによく遠吠し、夕方や夜間の一定時刻に各犬が一斉に遠吠をする

こともある。しかし、稟性のある他犬種のように著しくワンワンと吠えることはあまりしない。

V. 南極隊樺太犬訓練所の概要

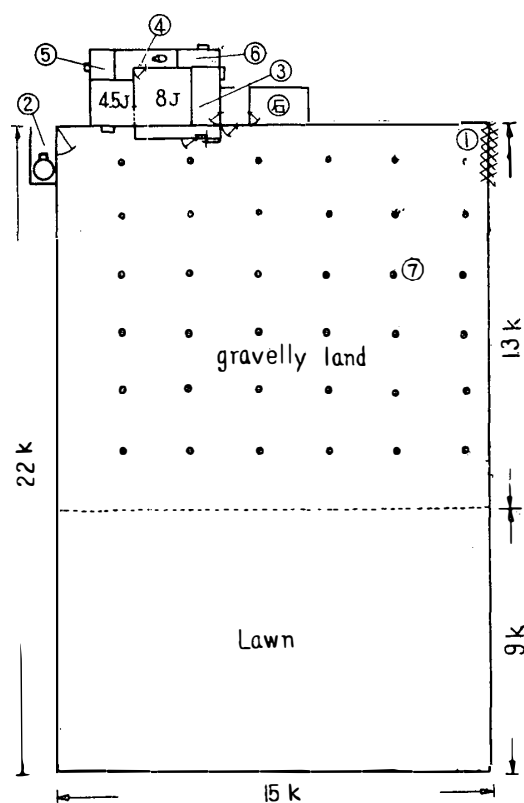
北海道内の約 1,000 頭の樺太犬のうち 40 頭~50 頭がソリ犬として期待できるものと認め、買上げに際しては、実役に従事して牽引力が旺盛で、健康な犬であることを目標とした。もつとも実役に従事していなくとも、訓練によつて十分牽引力が備わると認めたものを購入した。

犬ソリ訓練所をもうけるにあつては、次の諸点を考慮し、稚内市の厚意によつて稚内公園裏山の高台に第 2 図の如き飼育所 (330 坪) と管理所 (13.5 坪) を設置した。

1. 積雪地で、できるだけ寒く、風速の強いこと。
2. 市街地との交通が便利で、しかも他の病犬や見物人と隔離し、十分な訓練コースのとれること。
3. 飼料である魚が新鮮で、しかも安価に十分に入手できること。

訓練所は北大極地研究グループが管理し、稚内市役所から事務的な援助をうけた。訓練参加者及び直接関係のあつたものは次の通りである。犬飼哲夫 (責任者), 芳賀良一, 木崎甲子郎, 小林年, 永光俊一, 安藤久男, 加納正敏, 牧野博恒, 及川収 (以上北大), 菊地徹 (地質調査所), 北村泰一 (京大), 加納一郎 (顧問), 小川幸一, 佐藤忠一郎, 中川伸一 (以上稚内市役所), 草皆安太郎, 後藤直太郎 (以上訓練師), 西村作男, 小柳慶吾 (以上雇)。

訓練所は昭和 31 年 3 月 20 日に開設し、直ちに残雪を利用して訓練を開始した。同年 10 月 29 日に第 1 次観測隊参加犬 20 頭と仔犬 2 頭をおくりだし、その後本観測隊のためのソリ犬訓練を行つたが、昭和 32 年度の本観測には、ソリ犬をもつて行かないことが決定したので、



- ①・・・14 番線 2 吋目うす網 (高さ 6 尺)
wire netting (6 feet high)
- ②・・・調理釜 kettle for cooking
- ③・・・ストーブ stove
- ④・・・風呂場 bath-room
- ⑤・・・便所 water-closet
- ⑥・・・流し sink
- ⑦・・・犬の繫留杭 (3 寸落葉樹高サ 3 尺)
mooring stake for dogs (3 feet high)

k: ken, Japanese unit of length, equal to about 6 feet.

J: jo, Japanese unit of floor space, equal to about 36 square feet.

第 2 図 訓練所平面略図

Fig. 2. Outline of the training place.

昭和 32 年 7 月 31 日に閉鎖した。各犬は旧所有者に返還して 8 月 3 日に全部札幌市の北海道大学博物館に引揚げ、以後北大博物館において、繁殖犬を管理飼育することとなった。尚犬関係の準備全般は北大博物館において行われた。

VI. ソリ犬訓練の概要

ソリ犬訓練は昭和 31 年 3 月 20 日訓練所開設と同時に開始した。訓練コースは稚内公園裏山を主とした全長 4~6 km のもので、時に 28 km に及んだ。ソリの積載量は雪質によつて変えたが、通常 350~500 kg で、積載物は土俵（1 俵約 160 kg）とした。このほかドライバーが 3 人乗り、人間は登り坂ではおりたり、犬の牽引力や疲労に応じて適当に調節した。訓練の経過概要を第 4 表に示す。

第 4 表 訓練一覧表 Table 4. Diary of training.

月	日	訓練名称	内 容
1956.	3-20~ 4-10	第一次基礎訓練	個体調査, 先導犬選定, 順位制及びグループ制研究
"	4-11~ 5-10	第二次基礎訓練	土ソリによる犬ソリ編成(A班・B班・C班)チームワーク調整
"	5-11~ 5-31	総合訓練	立山訓練及び訓練地総合訓練
"	6- 1~ 7-15	春季訓練	先導犬特別訓練, 牽引力耐久力の増強
"	7-16~ 8-10	夏期訓練(前)	先導犬候補の特別訓練
"	8-11~ 8-20	夏季休暇	気温上昇により休暇(戸田訓練)
"	8-21~ 9- 5	夏期訓練(後)	前に同じ
"	9- 6~10-15	秋季訓練	牽引力・耐久力の増強, 食餌栄養管理
"	10-16~10-28	調整訓練	健康管理, 犬箱生活訓練, 出航準備
"	10-29~11-15	調整休暇	第一次観測隊参加犬出発のため休暇
"	11-16~11-30	第三次基礎訓練	個体調査, 先導犬選定
"	12- 1~12-28	冬期訓練(前)	先導犬特別訓練, チームワーク調整
"	12-29~1957. 1-3	正月休暇	休暇
1957.	1- 4~ 2-20	冬期訓練(中)	牽引力・耐久力の増強及び耐寒試験
"	2-21~ 3- 3	総合訓練	稚内~旭川間 266 km 総合訓練
"	3- 3~ 3-15	休暇	休養
"	3-16~ 4-22	冬季訓練(後)	隊員候補者犬ソリ技術修得訓練
"	4-22~ 7-22	春季訓練	土ソリによる調整訓練

1. 第一次基礎訓練 (1956 年 3 月 20 日~4 月 10 日)

個体調査によつて犬のクセを知り、互に気のあると思われる 3~5 頭を一本の主綱(曳き綱)につなぎ、グループとしての融和性を検討した。またグループ内での強弱関係(順位制)を決定し、同時に先導犬の適性検査を行つた。第一次基礎訓練の主目的は先導犬を発見し、チームワークをととのえることで、その結果リキ及びクマ(紋別)が有力候補となつた。そこで両犬を先導犬として暫定的に下記の通りチームを編成し、牽引訓練を行つた。

[A班] リキ, シロ(札幌), テツ(旭川), アンコ, ゴロ, アカ(稚内), モク(札幌), テツ(札幌), デリー, トム, モク(深川), クマ(比布)。

[B班] クマ(紋別), ジョン(利尻), ポチ, クマ(沼田), シロ(利尻), アカ(杓形), ベック, ジョン(杓形), ジャック, モク(新得), クマ(風連).

訓練中1頭が心臓マヒのため死亡し, 不適當犬は返還した. 尚, この訓練は主に草皆安太郎訓練師を中心として行われ, その後後藤直太郎が訓練師として参加した.

2. 第二次基礎訓練 (1956年4月11日~5月10日)

第1次基礎訓練から, これらの犬達が, ソリ犬として十分期待できることを知り, 本格的な訓練を開始した. しかし雪は4月初旬には全く消えたので, 土ソリによつて訓練を行つた. この頃の犬の状態は, 犬同志が互に牽制し合つて全力を牽引に發揮できず, 精神的に早く疲れてしまう状態であつた. したがつて犬同志の融和をはかり, チームワークの調整をとり, 持てる力をすべて牽引力にするように努力した. 同時に先導犬の向上にもつとめた. その結果, ようやく犬同志が互に自己の位置を認識し, また訓練所によくなじむようになつた.

3. 総合訓練 (1956年5月11日~5月31日)

富山県立山における南極隊総合訓練に参加のため, 大型犬ソリ(3号型)及び小型犬ソリの2台と, リキを先導犬として, クマ(風連), クマ(比布), アンコ, モク(深川), ゴロ, テツ(旭川)の7頭の犬及び後藤直太郎訓練師, 菊地徹, 木崎甲子郎の三人を送つた. 立山訓練での犬ソリ行動に関しては別項(菊地徹:立山総合訓練犬関係報告)に述べるが, 総合訓練終了後における雪上特別訓練のため, 隊員候補者以外に小林年及び永光俊一の2名が参加した.

4. 春季訓練 (1956年6月1日~7月15日)

先導犬の特別訓練により, リキ, テツ(旭川), クマ(紋別)はドライバーの前進(トートー), 右(カイ), 左(チョイ), 及び停止(ブライイ又はブルー)の号令(樺太土人語)によつて自由に動くようになつた. 牽引力は土ソリであるために雪上の場合と比較できないが, 耐久時間, すなわち牽引の持続時間が著しくのびたことから, 相当に強化したものである.

A班 リキ, テツ(旭), トム, クマ(沼), クロ, モク(深), デリー, テツ(札), ジョン(杓), モク(新), ジャック(利).

B班 クマ(紋), アカ(稚), シロ(札), ポチ, ゴロ, アンコ, ベック, モク(札), アカ(利), クマ(風), ジャック(札), クマ(比).

5. 夏季訓練(前) (1956年7月16日~8月10日)

夏季の気温上昇によつて食欲が減少し, 体力の消耗が目立つ. そのため午前4時~6時の早朝に訓練し, 距離を短縮して極端な訓練をさせた. 主にチームワークの調整をはかり, リキ, クマ(紋), テツ(旭)以外の犬から先導犬候補を作りだすことを行つた.

土ソリ以外に特別製の四輪訓練車を作つてみたが, 車体が軽すぎて十分ブレーキがきかず, 訓練にはあまり効果がなかつた.

6. 夏季休暇 (1956年8月11日~8月20日)

気温上昇のため訓練を中止.

7. 夏季訓練(後) (1956年8月21日～9月5日)

気温が比較的高いため極端な訓練をさげ、チームワークの調整と先導犬の訓練を、極く早朝に軽く行つた。

8. 秋季訓練 (1956年9月6日～10月15日)

犬の能力判定と健康診断の結果から、第一次観測隊参加犬の候補を下記の通り選抜し、食餌管理に留意しながら牽引力、耐久力の増強をはかつた。

A班 10頭 ①リキ(先導犬), ②アカ(稚)(先導犬候補), ③ベック(先導犬候補), ④デリー, ⑤ポチ, ⑥アンコ, ⑦クロ(利), ⑧トム, ⑨タロ, ⑩クマ(風).

B班 10頭 ①テツ(旭)(先導犬), ②クマ(紋)(先導犬), ③ベス, ④シロ(利), ⑤ゴロ, ⑥モク(深), ⑦モク(私), ⑧ジロ, ⑨ジャック(杏), ⑩クマ(比).

9. 調整訓練 (1956年10月10日～10月28日)

牽引訓練は十分に行われ、また食餌管理等によつて健康も殆んど満足すべき状態に保たれてきた。そこで先導犬候補の訓練とチームワークをはかるための軽い訓練を行いながら、各犬を運送用の犬箱に入れて、犬箱生活に馴れさせた。第一次参加犬としてA班10頭、B班10頭の成犬(全部雄)に雌2頭の幼犬を加え、合計22頭を予定した。

10. 調整休暇 (1956年10月29日～11月15日)

10月29日第一次参加犬の成犬20頭を犬箱に入れて貨車1輛に積み込み、管理のため2名が同乗して稚内を出発し、11月3日早朝に全犬無事秋葉原駅に到着した。直ちにトラックで晴見埠頭に運び、1夜を埠頭に休ませて、11月6日に宗谷の犬部屋におさめた。

宗谷出航後は暫らく訓練を中止し、残留犬の整備補充を計画し、また購入犬の調査を行つた。

11. 第三次基礎訓練 (1956年11月16日～11月30日)

残留犬の中から新たに先導犬を育成することを本期間の目的とし、ジャック(杏形)、シロ(札幌)及びマルを候補犬とした。また新たに訓練所入りした蕃殖犬5頭(パラ、フジ、ロク、ハチ、マサ)及びライ、ラス、エツ等の購入犬を残留犬に加え、チームワークの調整をはかつた。

12. 冬季訓練(前) (1956年12月1日～12月28日)

残留犬中見込みのない犬は旧所有者に返還し、また健康の十分でない犬は補欠犬程度に考え、当訓練所において蕃殖した若犬と新たに加えた優秀犬をもつて積雪期の本格的訓練を行つた。

ジャック(利尻)(先導犬)、シロ(札幌)(先導犬候補)、マサ(先導犬候補)、マル(先導犬候補)、ライ、ラス、ロク、ハチ、パラ、サブ、フジ、エツ、クマ(沼田)、シロ(♀)、ジョン(利尻)、ジャック(札幌)の16頭とキチ、ミチ、ヤマ、タケの幼犬4頭計20頭を主体にし、本観測参加犬として2チーム編成できるように準備した。若犬が主体であるため、チームワークを主体にし、極度の牽引作業はさけて、犬の發育及び体力の充実にしたがって徐々に作業を強化した。また先導犬としてジャック(利尻)、シロ(札幌)、マル、マサを特に訓練した。

13. 正月休暇 (1956 年 12 月 29 日～1957 年 1 月 3 日)**14. 冬期訓練(中) (1957 年 1 月 4 日～2 月 20 日)**

若犬のバラ, フジ, ロク, マサ, ハチは体力が充実し, ライ, ラス, エツ等の新入犬も全く訓練所になじみ, 残留犬と下記の如く組合せて訓練を行つた. その結果連日の降雪にもかかわらず, 第一次参加犬におとらぬ牽引力を示し, 耐久力も徐々に増した. 尚, 訓練中サブは腰椎炎, フジは交通事故でそれぞれ死亡した.

A班 ジャック(利), シロ(札幌), クマ(沼), ラス, ライ, アカ(利), リュー, ミミ, ハチ, ロク.

B班 マル, テツ(札幌), ジョン, シロ(雌), バラ, ジャック(札幌), アカ(札幌), エツ, マサ.

犬の訓練を行う一方, 前年の積雪期に実験できなかつた各種の極地用犬関係資材のテストを行い, 犬自身についても野営等を行つて総合的訓練を行つた. 装備等は極地からの連絡によつて改良し, 特に犬ソリはパドル等に適当な舟型ソリ(防衛庁陸上自衛隊アキオ=31 年型)等を試験し, 深雪には有効であることを確認した.

15. 冬期総合訓練 (1957 年 2 月 21 日～3 月 3 日)

極地における犬ソリ隊の行動に準じ, 下記の通り総合訓練を行つた. 尚詳報は別項にのべる(木崎甲子郎: 冬期総合訓練犬関係報告).

1) 参加者 (I) 設営部門(犬関係) 3 名〔犬飼哲夫, 芳賀良一, 後藤直太郎〕

(II) 観測部門(地質・地理関係) 4 名〔久野久, 中沢圭二, 木崎甲子郎, 吉田栄夫〕

2) 参加犬 大型ソリは 12 頭曳とし, 深雪時には 1～2 頭の犬スキーを先行せしめる. 小型ソリは 5 頭曳きとし, 大型ソリの前駆となる.

大型ソリ ジャック(利), クマ(沼), リュー, ラス, マル, ライ, バラ, シロ(雌), ハチ, ロク, ジャック(札幌), アカ(利). (犬スキーの場合はマルを使用)

小型ソリ シロ(札幌), マサ, ジョン, ミミ, エツ.

3) 行動距離 稚内・旭川間 266 km.

4) 積荷重量 大型 370 kg, 外ドライバー 3 名 (200 kg)

小型 120 kg, 外ドライバー 2 名 (150 kg)

小計 大型 570 kg, 小型 270 kg

合計 840 kg

5) 行動日数 昭和 32 年 2 月 21 日より 3 月 3 日まで 11 日間 (実動 61 時間)

16. 訓練休暇 (1957 年 3 月 3 日～3 月 15 日)

総合訓練による犬の疲労回復のため休養.

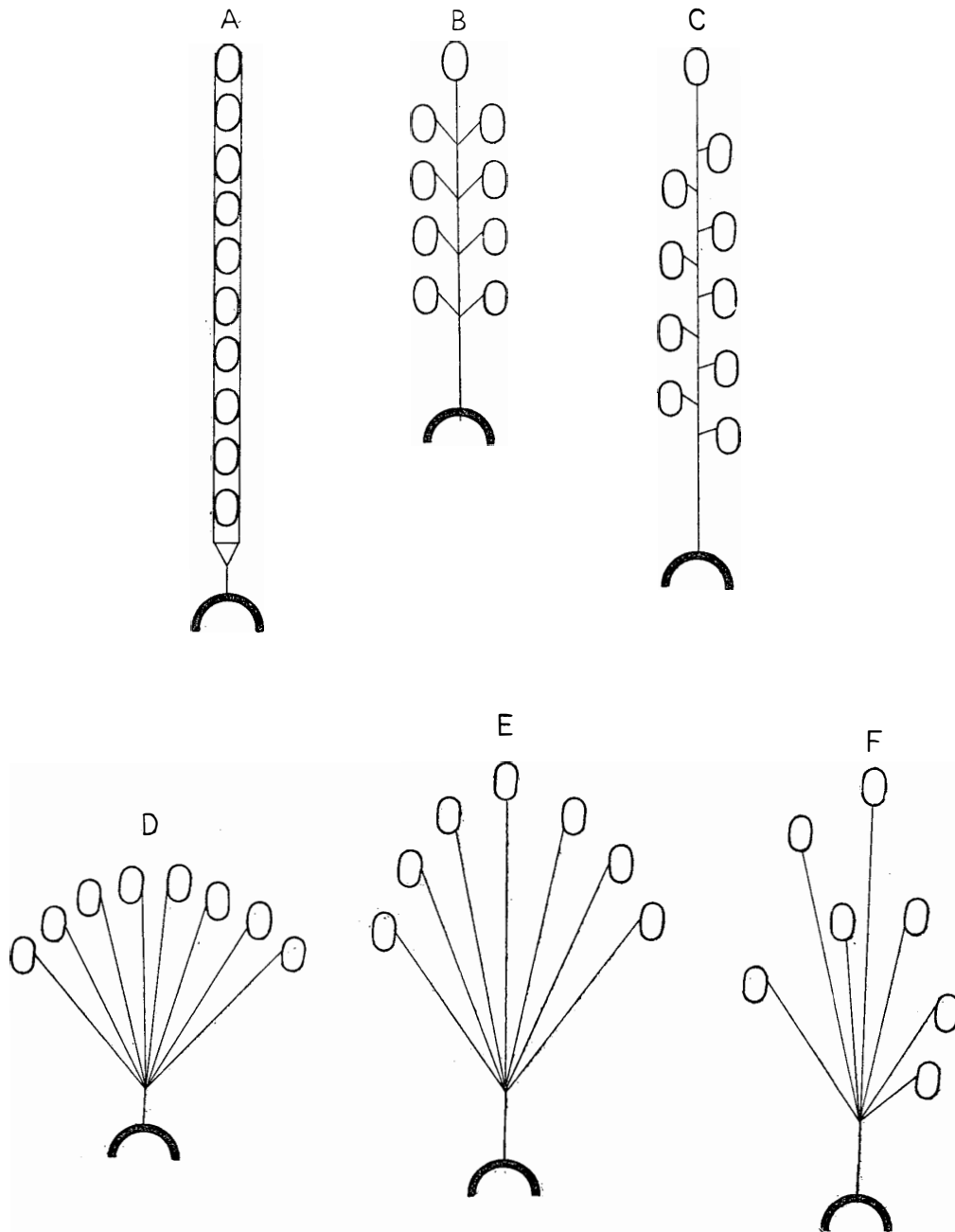
17. 冬期訓練(後) (1957 年 3 月 16 日～4 月 22 日)

冬期総合訓練によつて犬の眞の行動力を知ることができ, 極地でソリ犬として十分活動できることが推察された. しかし種々の理由から, 本観測には補充犬として 5～6 頭参加という縮小計画に変更され, それにともなつて訓練所も縮小した. このため犬の牽引訓練よりも, 隊員

候補者の犬ソリの操作技術が重要となり、それを主体にした訓練を行った。

18. 春季訓練 (1957年4月22日～7月22日)

土ソリによる調整訓練と先導犬訓練を行ったが、本観測には犬は追加されないことが確実化しつつあつて、また犬自身の力も十分と認められたので、健康管理を主体として軽度の訓練に



- | | | |
|----|---------|--------------------------|
| A. | 1 列 型 | straight arrangement |
| B. | 相 曳 型 | coupled arrangement |
| C. | 樺 太 型 | Saghalien type |
| D. | 扇 型 | fan-shaped type |
| E. | 変 形 扇 型 | modified fan-shaped type |
| F. | エスキモー型 | Eskimo-type |

第3図 犬ソリの牽引型模式図

Fig. 3. Various types of arrangement of tow-lines.

とどめた。その後7月15日付をもつて本観測には犬は全く追加されないことが決定したので、7月22日訓練中止、7月31日をもつて稚内訓練所を閉鎖した。尚訓練中止後、犬は訓練所での蕃殖犬以外のものはすべて旧所有者に返還し、訓練所のすべては8月3日に札幌市の北大農学部附属博物館に引き揚げた。

VII. 訓練犬の性能について

一般に世界の犬ソリ（10頭曳き）の標準は積載量 350 kg で1日 20 km とされているが、本訓練所の樺太犬は冬期総合訓練に於て、積載量 370 kg で1.1日間に 266 km を走破した。またよく除雪された道路では 1037 kg を積載して走行した。1日の行動距離は、雪の状態によつて著しく変動があるが、一般に 20 km~30 km である。しかし犬は実動5時間が長距離行動時の限度で、したがつて1時間に 4 km が普通である。1時間のうち15分は休憩時間であるから、走行時速は平均 5 km, 最大 10 km である。これらの成績は諸外国の犬ソリ隊の行動と比較してむしろ良い成績で、多くの状態を考慮しても標準に達していると思われる。しかしながら、実動5時間 20 km の犬ソリの行動力は、少くとも1日8時間で 30 km~40 km の行動力と長日数の耐久力とを目標として、犬体そのものを改良し、またソリ及び飼料を改良する等、努力すべきものとする。

犬ソリや曳具その他については別項に詳述するが、イギリス、ノルウェー、スウェーデンの三国協同隊において使用した型を一部改良して使用した。犬ソリ牽引の形式は第3図に示すように様々な方法があるが、一本の主綱から交互に1頭づつ配列する樺太型で、外国隊で行われる2頭配列の相曳型ではない。効率からみると、犬の牽引力をそのままソリにつたえるためには後者の方がすぐれているが、深雪時には曳き犬の疲労が早い。樺太型は1列型と相曳型の中間型で、深雪にも堅雪にもよい樺太独特の型である。

引 用 文 献

- 1) 日下哲夫 (1944): 樺太犬について 北部軍獣医部.
- 2) 犬飼哲夫 (1943): 樺太犬調査 (昭和 14 年).
- 3) 犬飼哲夫, 芳賀良一 (1957): 樺太犬考 (I) 北方文化研報 第 12 輯.
- 4) 竹内 恭 (1949): 樺太犬に関する二・三の調査 生物 Vol. 4, No. 5~6.
- 5) 梅棹忠夫 (1943): 犬糞の研究 探検第 3 号.
- 6) 唯是日出彦 (1935): 小樽地方の輓曳犬 犬の研究 11 月.